

企画・発行・編集 災害ボランティアぐんま  
災害ボランティアぐんま事務局(昭和庁舎1階)  
〒371-8570 前橋市大手町1-1-1  
Tel&Fax 027-221-5771  
URL : <http://www12.wind.ne.jp/saivol/>  
E-mail : [saivol-g@dan.wind.ne.jp](mailto:saivol-g@dan.wind.ne.jp)

## みなかみ町除雪ボランティア

# 1月31日～2月4日の5日間で

# 109人

この冬、記録的な豪雪に見舞われたみなかみ町水上地区。「災害ボランティアぐんま」は、県と協働で「除雪ボランティア」を公募し、1月31日から2月4日までの5日間、藤原小学校、藤原中学校で除雪作業を行いました。

5日間で、県外からの13人を含む延べ109人が参加。志村神麿副理事長の指揮で、高さ5メートルの雪の山をスコップやスノーダンプを使って除雪作業に奮闘しました。



スノーダンプなどを使って除雪作業に奮闘

水上インターを下りて藤原方面へと向かうときの巨大な雪の壁は想像以上。突き刺すように垂れ下がるつらの恐怖など、豪雪のすさまじさは、現地に来てみないとわからないものでした。

災害ボランティアぐんまでは、今後も、災害時には、お互いが助け合える環境づくりに懸命に取り組んでいきたいと思えます。



作業工程を伝える志村神麿副理事長(右)



除雪前の藤原小学校。想像以上の積雪だった

## 除雪ボランティアを実施して

災害ボランティアぐんま

会長 四方浩

「災害ボランティアぐんま」と群馬県が協働して、みなかみ町除雪ボランティアを募集したところ、多くの方々に参加していただき誠にありがとうございました。また、現地での厳しい活動・気象条件を考慮して60歳以上の方をお断りしたこと、参加希望者が多く多数の方々に参加をお断りしたことについて、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

今回の除雪ボランティアは1月31日から2月4日の5日間に延べ109人のボランティアの方々に参加を得て、5メートルを超える積雪の中、藤原小学校校舎裏の除雪や藤原中学校プール更衣室の雪下ろし等を行いました。

こうした作業が滞りなく行われたことは、みなかみ町や県の関係者、小学校・中学校教職員の皆様など多くの方々のご協力によるものであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

特に、水上観光協会様、水上温泉旅館協同組合様のご配慮で、除雪終了後に地元水上温泉で入浴し疲れと汗を流すことができたこと、現地に多くの貴重な物資を差し入れていただいたサンヨー食品株式会社様、群馬ヤクルト販売株式会社様に改めて感謝いたします。

災害ボランティアぐんまではこうした支援活動とともに、支援技術の習得を目指し研修会等を開催する計画です。今後ともご支援ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## 留学生と参加して

下田 兼六 さん（富士見村）

雪で2階の窓が見えない小学校…庭を歩いていると思ったら、いつの間にかプールの更衣室の屋根に着いていた。そんな所で除雪作業を体験した2人のフィリピンの青年。彼らにとつて帰国後、雪の話題が出た時には、必ずこの経験が思い出されることだろう。

誰しも何らかの形で税金を納めている。それに対する権利の主張は少し控えめにし、人々は余暇の時間をボランティア団体やNPOに身を置き、それらの事業活動の相互協力や自助努力で地域社会の維持管理を出来るだけ行い、小さな政府を早く実現すべきだと思っている。

下田さんは、フィリピンからの農業研修生を受け入れており、一緒に参加しました。

## 4日間の貴重な体験

武尾 学 さん（前橋市）

毎日のように記録的な大雪が報道され、自分にも何かできるのではないかと考えていた矢先、ボランティアの募集がありました。4日間、豪雪に悪戦苦闘し、貴重な体験をすることができました。

災害時のボランティアは、被災地での防災活動や支援活動など多岐にわた

る活動が要求され、行政機関が対応しきれない分野で、その能力を發揮するものと考えます。今後も活動に参加し、皆さんと訓練や研修を重ねレベルアップしたいと思っています。

いかなる災害でも、『災害ボランティアアグンマ』ここにあり、と胸を張れる組織となるよう協力していきたいと思っています。

武尾さんは消防署に勤務し、職場の皆さんと参加しました。

## お礼の言葉

みなかみ町長 鈴木 和雄 様

先般の本町における雪害対処に際しましては、地元小中学校の雪下ろし作業を始め、周辺の除雪作業など、長期にわたり多大なご支援ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

ご承知のとおり昨年の暮れから断続的に降り続いた雪は、未曾有の豪雪となり本町を襲いました。町では2005年12月28日に「みなかみ町豪雪対策本部」を設置し、以来、関係各機関の

ご協力を得ながら、懸命な除雪対策を講じてまいりましたが、降雪に対し除雪作業が追いつかず、交通機関のマヒや家屋倒壊の懸念など住民生活は不安の毎日でした。そのような中、貴殿を始めとする町内外からの沢山のご厚意が大きな後ろ盾となりましたことは感謝の極みであります。

今回の経験を今後の冬季対応に反映するべく鋭意努力する所存でありますので、これからも変わらぬご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。



除雪作業の合間にも容赦なく雪は降り続ける



昼食時間。協賛いただいたカッブライメンやジュースで一息つくメンバー



プール更衣室の屋根まで覆われていた雪を除雪していった



「第1回災害ボランティア講習会」(NPO法人社会技術研究所との共催)が、2005年11月27日、県庁ビクターセンターで開催されました。講習会でお話いただいた群馬大学工学部教授の片田敏孝氏の講演内容を掲載します。

記念講演

テーマ「災害被災者の行動心理」

群馬大学工学部建設工学科教授 片田敏孝氏

災害は社会的概念

はじめに、「災害は社会的概念である」ということを、頭に入れておかなければなりません。人の対応の如何によって被害の多寡が変わってきます。1人でも犠牲者を少なくするために、災害の社会対応力の向上が大事です。そこで、人は災害をどう理解するかという話をしたいと思います。

近い将来、日本にも大地震、大津波がやってくるといわれています。しかし、日本は情報の伝達も早いし、津波の経験が豊富なため、インド洋のよう



な被害は起こらないであろうと考えられています。けれども僕は違うと思うのです。理由は2

つ。情報はいつも届くとは限りません。震度7になると停電し、情報伝達システムは機能しません。さらに、もっと深刻な問題があります。情報が届いても住民はまったく動かないのです。

津波がきたら高台へ逃げる

2003年5月26日の夕方6時24分、三陸沿岸で大きな地震がありました。震度6弱から5強の非常に大きい揺れです。しかし、気仙沼市の津波避難率は、1・7%。同市は、防潮堤を作り、防災マップを配り、防災講演会を開き、地域ごとに防災訓練もしている。防災意識が非常に高い地域です。それなのに、なぜ逃げなかったのか。その原因を突き止めないと大変なことになる、私は住民の行動心理を調査しました。

「あなたは逃げましたか？」と聞くと、8%が「逃げた」と言います。しかし、実態は「慌てて外に出た」「トイレに駆け込んだ」など。津波で逃げるといふことは、海に背を向け高台に向かつて一直線に走ることをいふのです。

正常化の偏見とは

ここで、逃げない住民の心をもう少し深く掘り下げてみましょう。

「地震がきたとき、津波という言葉葉が浮かんだ」が90%、「津波がくると思った」が60%。ところが、「身の危険を感じた」は11%。多くの人は津波がくると思っっているのに、自分の命は大丈夫と思っっているのです。「ここで、2つの重要なキーワードを覚えてほしいと思います。

1つは、「正常化の偏見」。自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過少評価することです。具体例をいいますと、日本では交通事故で1年間に8000人が亡くなっています。でも、自分がそうなるとはだれも思わない。一方、年末ジャンボ宝くじが仮に8000人、億万長者が出るとすると、自分にもチャンスがあると思うでしょう。同じ8000人でも都合の悪いことは無視し、都合のいいことは信じるわけです。

また、人間は不安になると自分が置かれている状況を知りたいと情報収集に走る。気仙沼市民も一斉にテレビをつけて情報を待っていた。その間に、津波がやってくることもあるのです。

わかっているけど...

もう1つの重要なキーワードは、「認知的不協和」。つまり、「わかって

いるけど...」ということ。気仙沼市民はみんな避難勧告が出たら逃げなければならぬことはわかっている。しかし、頭と行動に矛盾が生じると、自分を正当化しようとする。「この前も津波はこなかった」「隣も逃げていない」など心の保障を探し、結局、逃げないのです。

非常におもしろい調査結果があります。「近所の人为非難する姿を見たら逃げる」が64%、「近所の人为非難を呼びかけたら逃げる」が73%。つまり、ほとんどの人が「逃げない」ことを選んだわけではなく、「逃げる」という意思決定ができなかっただけなのです。近所の人、血相変えて逃げていけば自分も逃げる。それが、住民の心のメカニズムです。

自主防災組織や防災グッズを整えることも大事ですが、地域の自主防災組織に「率先避難者」を作ってほしい。グラツときたら、大騒ぎして逃げていく。そうすることで、みんなが逃げて被害がなくなると思うわけです。今後、皆さんには、防災のリーダーとして地域に目を向けてほしいと思います。

片田 敏孝 氏  
プロフィール

群馬大学工学部建設工学科教授。専門は災害社会学。2004年12月26日に発生したスマトラ沖地震に伴うインド洋津波の影響について、米国地震工学会の要請で国際調査団の一員として参加した。災害ボランティアぐんまの理事にも就任しています。

防災豆知識

< 1 >

忘れてイナイ (171) ?

『災害伝言ダイヤル171』  
『iモード災害用伝言板サービス』

災害の発生時、気がかりなのが家族や知人の安否です。NTTグループ各社が提供している『災害伝言ダイヤル171』と『iモード災害用伝言板サービス』は、電話を使って記録した文字や音声メッセージで安否が確認できます。

災害伝言ダイヤル『171』

「171」をダイヤルし、音声ガイダンスに従って伝言の録音、再生を行います。

iモード災害用伝言板サービス

iMenu お知らせ&ヘルプ 災害用伝言板サービスについて、の順で進みます。

ボーダフォンやKDDI、ウィルコム各社も同様のサービスを実施しています。

「いざ本番」に備えて  
災害ボランティアぐんま副理事長  
志村 神麿

2006年1月14日、「災害ボランティアぐんま」による第2回講習会「レスキューキッチンによる炊き出し訓練・被災地での心の癒しボランティア活動(シュロの葉工作)・普通救命講習」を県庁で行った。自衛隊・消防・警察などが参加した群馬の防災展も開催中で、当日の県庁は「防災、つくし」であった。

炊き出し訓練は、ハイゼックス包装食作りと機材の取り扱いに苦労したが、電気炊飯器以上の味と絶賛され、レトルトカレーも美味でおかわりもでる盛況であり、用意したハイゼックスや米も足りないとい心配するほどであった。昼食では防災展に参加していた自衛隊から豚汁が振る舞われ、また持参

した地元群馬町国分(現高崎市)の白菜漬けやタクワンなどが添えられ大好評であった。

シュロの葉の工作は昭和庁舎21会議室で、炊き出し訓練の炊飯時間を利用して、お金も道具も使わずに子どもに大変好評である「バツタづくり」に挑戦した。ボランティアの清水千恵美先生の指導のもと、短時間での習得を目指して参加者全員が熱心に作業し、満足できるすばらしい作品を作り上げた。午後は前橋市消防本部中央消防署千代田分署のご協力により普通救命講習を受講した。5人1組で8班に別れ、AED(自動体外式除細動器)の操作や患者役の人形を使っての体験を、県庁28階の281会議室で行った。消防署員の熱心な指導で本番さながらの訓練を、各人が自信がつくまで何回も繰り返し行った。講習を受け資格を取ればそれで終わりではなく、機会のある

毎に錬成し、いざというときに役立つ土壌を備えていただきたい。これが今回の狙いであり、頼れる「災害ボランティアぐんま」なのだ。  
今回の講習会は内容が盛り沢山過ぎた感はあるが、事務局を始め災害ボランティアぐんまの役員全員で企画立案したもので、中身の濃いものとなった。今後も会員の要望を踏まえた研修を行い、「災害ボランティアぐんま」が県民に期待されるよう更に頑張っていきたい。



AEDでの操作訓練

編集後記

1月14日の第2回講習会に参加者は真剣に取り組みました。その真剣さと熱意が実践で生かされたのは、約2週間後のことです。みなかみ町水上地区への除雪ボランティアが「災害ボランティアぐんま」の初出動となりました。志願者はすぐに募集人数を超え、リーダーの指揮のもとで力を合わせて被災地のお役に立てたことは、喜ばしい限りです。この経験を生かしながらさらなる「地域防災」の充実に励んでいきたいと思えます。今後ともご支援ご協力よろしくお願ひします。

災害ボランティアぐんま企画委員長  
伊藤 亜都子



たきだし訓練